

<センター通信>2019年日文研特別公開シンポジウム ： 「天皇と皇位継承 過去と現在の視座」 について

著者	グリーン ジョン
雑誌名	日文研
巻	64
ページ	68-71
発行年	2020-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1368/00007491/

二〇一九年日文研特別公開シンポジウム… 「天皇と皇位継承―過去と現在の視座」について

ジョン・ブリーン

毎年秋に、日文研では「一般公開」というイベントを開催する。我々の活動を広く一般に紹介するのが目的で、施設を公開し、教員やゲストスピーカーによる講演・座談会を催し、所蔵資料を展示し、施設案内なども行う。学者同士だけでなく、一般の方々とも接することのできる機会であり、我々の年中行事の中でもとりわけ楽しい一日である。二〇一九年は講堂の改修工事などのため一般公開は開催不能となったが、一般の方々に是非とも秋のイベントを提供したいという声日文研所内から上がった。以上がこの特別な公開シンポジウムが生まれた経緯である。さて問題は、テーマと発表者をどうするか、開催場所をどこにして、開催時期を一体いつにすればいいのか。一から決めなければいけないことばかりであった。

実行委員長を仰せつかった筆者は、テーマとして「天皇と皇位継承」を提案した。自分の近代天皇の研究とも重なり、

また所内には古代・中世・近世の天皇を研究する同僚もいる。何よりも、タイムリーなテーマであった。二〇一九年四月三〇日、歴史上特筆すべき代替わりが行われた。天皇の退位に先立ち、二〇一六年八月に全国のテレビ放送局が天皇の「おことば」を報道した。前例のないおことばは、天皇が退位の意向をにじませるもので、さらには象徴天皇はこうあるべきではないかという自らの天皇論を披露した。それは、その後様々な天皇論が飛び交う契機となるものであった。政府は「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」を公布せざるを得なくなり、二〇二〇年ぶりの「生前退位」が実現した。二〇一九年は天皇以上にホットな話題がなかったのである。

天皇問題に学際的かつ国際的に取り組むことができる研究所は、日文研ぐらいしかないと自負しているが、さて、発表者を誰にすればいいのか。結局、まずは言い出しっべの筆者が手を挙げた。その後は、ご快諾をいただいた順番はもう覚えていないが、古代文学・古代王権の大家で元号「令和」の考案者ともされている日文研名誉教授の中西進先生、古代から近世までの天皇に詳しい倉本一宏教授、近世史全般に造詣が深い磯田道史准教授の参加が決まった。同時に、天皇と皇位継承を語るには外からの比較的な視座も欠かせないと思

い、欧州王室研究の第一人者である関東学院大学の君塚直隆教授にも協力を仰ぎ、参加いただけることとなった。

テーマと発表者はこうして決まったが、次に悩むことになったのは開催の場所である。日文研の講堂は五六〇名まで収容可能な極めて広いスペースを誇っているが、残念ながら工事のため使えない。似たような施設は京都市内のどこにあるのか。二〇ほどの施設をリストアップし、見込みのあるところには足を運んだ結果、京都府立京都学・歴史館が我々のニーズに最も適しているとの結論を出した。歴史館の大ホールは四三〇名が収容可能な最新の施設であり、京都市営地下鉄烏丸線北山駅から徒歩5分もかからない、非常にアクセスのいい場所にある。これまで日文研の研究活動を知る機会の少なかった社会人、学生などにアピールするには最適だと思った。歴史館のスタッフが我々の企画に大変関心を示してくれたことも心強いことであった。そして、歴史館で開催するに当たり、例年の一般公開とは異なる申し込み方法を導入することにした。ハガキまたはWEBフォームで申し込んでもらい、学生かどうかを確認し、定員四三〇名を超えた場合は抽選をする、しかも座席が選べない「全席指定」という新しいシステムをとった。最後に、特別公開シンポジウム開催

のタイミングについて、一〇月二二日の「即位礼正殿の儀」と一〇月一四日の「大嘗祭」の間なら世間の関心が最も高いのではないかと考え、歴史館と交渉の末、一〇月九日（土）午後と決めたのである。

日文研・歴史館共催となった「日文研 特別公開シンポジウム 天皇と皇位継承―過去と現在の視座」は二部構成で行った。第一部「古代の王権」では、中西名譽教授による講演『万葉集』と王権の後、続く磯田准教授との対談で飛鳥・奈良時代の王権・朝廷の姿に迫った。第二部「過去と現在の皇位継承」では、前半が倉本教授による「前近代の皇位継承」、筆者の「近代天皇制と皇位継承儀礼」、そして君塚教授による「欧州王室との比較で見た皇位継承」と題する各講演を行い、後半は発表者全員を巻き込んだ座談会とした。日文研准教授の楠綾子が全体の司会を務めた。

中西進名譽教授はその講演で『万葉集』歌人が天皇についてどのように記述し、大伴家持や柿本人麿らが天皇という存在をどう理解していたのかを論じた。『万葉集』では、「天皇」・「皇」に比べ「王」という表記が多く、それは天皇が王道を行う存在だと理解されていたことを示すと指摘した。「天皇」という表記は、大伴家持など編纂者だけが使っており、

そうすることで彼らは「天武朝の正当性を守ろうとしたのではないか」という考えを披露した。磯田准教授との対談で、テーマは飛鳥・奈良時代の王権そのものの問題にも及んだ。

日本古代史を専門とする倉本教授は、皇位継承の歴史的变化を取り上げて発表した。太上天皇と天皇という二重構造ができた奈良時代、摂関政治で天皇の母方のミウチ（藤原家）が権力を握った平安時代、そして幕府が皇位継承を左右する鎌倉・室町時代と、それぞれの皇位継承の特徴を解説した。

次に発表した筆者は、近現代の皇位継承儀礼を歴史文化人類学的な観点から検討し、天皇が皇位継承の場で権力関係を構築していく力学に光を当てた。筆者はとりわけ天皇と天照大神及び神武天皇をはじめとする歴代皇霊との関係構築に焦点を当て、皇位継承儀礼のルーツを明治維新にまで辿ってみた。

欧州国際政治が専門の君塚教授は、地球環境問題、多文化共生、女性・子どもの人権擁護などに率先して関与する欧州王室を紹介し、「令和の皇室のあり方に示唆を与えてくれる」可能性までを指摘した。オランダ、ベルギーなどでは君主の高齢化による生前退位がすでに慣例化している事実にも触れた。

これらの発表に続く座談会では、中西名誉教授が「日本にとって皇室とは何か」という命題を提示し、そこから活発な



特別公開シンポジウム座談会の様子

議論へと発展した。「今後の天皇制について国民一人ひとりが考え続けなければならない」というのが一種の結論であった。

今回の日文研・歴史館共催の特別公開シンポジウムはかなり盛況であった。参加者アンケートからも、テーマは十分に魅力的であり、登壇した先生方の発表も大いに興味を持たれたことが読み取れる。土曜日の開催もよかった。筆者が実行委員長として特に嬉しいのは、「今回初めて日文研の行事に参加した」という方々が多数いたことである。学生も多かった。歴史館の広報活動も功を奏しただろう。アンケートの自由記述部分を見れば、特別公開シンポジウムの中身に関しては積極的なレスポンスが圧倒的に多く、発表者は十分な知的刺激を参加者に与えたであろうことがうかがえる。

反省すべき点がないわけではない。筆者が実行委員長兼発表者として感じたのは、時間的な余裕のなさである。第二部では発表時間が発表者一人につき一七分しかなく、座談会も十分な時間が取れず、発表者はそれぞれ一回の発言だけで終わってしまった。アンケートでも、「時間が足りない」、「消化不良気味」、「一日のイベントにすぎなかった」などという意見が多くあった。音響的に多少の問題もあり、「声が反響してよく聞き取れなかった」、「上手く聞き取れない」、「音響

が悪い」など不満の声があったことも事実である。

以上のような問題点があったとはいえ、今回の日文研・歴史館共催の特別公開シンポジウムは、有意義で、収穫の多いものであったことに変わりはない。二〇二一年から従来通りの一般公開を秋に開催する予定であるが、いずれまた歴史館の皆さんと手を組んでイベントを催したいと思う次第である。

(国際日本文化研究センター教授)

共同研究「植民地帝国日本における知と権力」あとがきのあとがき

松田利彦

先頃、国際日本文化研究センターでの共同研究「植民地帝国日本における知と権力」(二〇一三〜一六年度)を終えた。この共同研究については、共同研究委員会に共同研究終了報告書を提出し、成果報告書『植民地帝国日本における知と権力』を編み、かつ、成果報告書を刊行してくださった思文閣出版の出している『鴨東通信』(二〇一九年四月号)には小